

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	松原秀一教授自筆略年譜・著作一覧
Sub Title	Repères biographiques et liste des publications principales
Author	松原, 秀一(Matsubara, Hideichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.63, (1993. 3) ,p.I- XVI
Abstract	
Notes	松原秀一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001--004">http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001--004</a>

松原 秀一 教授 自筆略年譜・著作一覽

## 略年譜

### 昭和五年

(西曆一九三〇)三月七日フランス国イゼール州グルノーブル市郊外トロンシュのクリニック・デ・ザルプで生まれる。父 松原 秀治(二八歳) 母 松原 滋子(二二歳)

### 昭和八年

両親と帰国、東京市麻布区霞町、次いで麴町区永田町に居住。

### 昭和十一年

四月、三田にあった慶応義塾幼稚舎に入学。この年二月二十六日、反乱軍によって自宅の前の文部省官舎が占拠され、小石川林町の母の実家、川崎友之介の家に避難した。途上、生まれて始めて重機関銃を三宅坂上で見る。

### 昭和十三年

九月、前年幼稚舎は天現寺の新校舎に移転。幼稚舎の担任が大谷先生から川村博通先生に代わる。舎長も小柴先生から清岡暎一先生に代わる。一家で祖父、重栄の住む麻布区本村町の家に移越す。

### 昭和十七年

四月、慶応義塾普通部に進学、三田に行つた日に初めてアメリカ軍の空襲あり、大学生が普通部生をグループにして送つて呉れた。普通部三年から学生動員で池貝チャック蒲田工場、強制疎開による家屋取り壊し作業等に従事、五反田星製菓前で艦載機の機銃掃射にあつたこともある。終戦前後には麻布十番の焼け跡整理などもした。普通部時代の思い出は暗いが佐々木一雄先生の国語、福崎和一郎先生の英語、土田富士雄先生の数学などが美しい思い出となっている。

### 昭和二十一年

四月、慶応義塾大学経済学部子科に進学。鮫島盛一郎先生の万葉集、源氏物語の講義、浅子勝二郎先生の日本文化史を傾聴した。浅子勝二郎先生には数人の級友と正福寺地藏堂、鎌倉など連れて行って頂き、古

## 昭和二四年

建築や仏像の見方の手ほどきもして頂いた。学徒動員で出征、航空訓練中に千葉沖で撃墜された叔父、故川崎精良から言われていた通りワグネル・ソサイエティーにオーボエを吹きたいといって入ったが楽器が無く『取りあえずコーラスに』入り大学院に入るまで部室の常連であった。フランス語の授業では横部徳三郎、二宮孝顕、佐藤朔などの先生が担当されモーパッサン『初雪』『水の上』『ボードレール』『パリの憂鬱』などを習った。慶應外語の夏期講習で大久保洋海、白井浩司等の先生にも習い、翌年から慶應外語のフランス語中級に入り、上級に進んで後藤末雄、アヌイ神父などの先生にならったが、高校生であった高山鉄男君もフランス語上級の同級生であった。

四月に経済学部（旧制）に進学、講師で来ておられた日仏学院院长、ジャン・ルキエ先生の授業でモンテランの『死せる王女』スタンダル『赤と黒』などを習った。この教室には浅野信二郎、牛田徳子さん以外には仏文科からは殆ど出席が無く常に四、五名位であった。

## 昭和二七年

五月、学制が代わって新制大学となり経済学部を小池先生の農業経済の追試を受けて五月に卒業、大学院仏文学専攻に進んだ。後藤先生にラシーヌ、佐藤朔先生にヴァレリー、井筒敏彦先生に独仏比較文体論、樋口勝彦先生にキケロ書簡、厨川文夫先生に中世フランス語、鈴木信太郎先生にフーレの『中世仏語文法』の講読などを受けた。学部での井上究一郎先生の一六世紀抒情詩、鈴木信太郎先生のマラルメ詩の授業も受けた。経済学部時代から聴講していた井筒敏彦先生の言語学も続けて聴講した。この年フランス政府給費招請留学生として渡仏する浅野君を横浜埠頭に見送りに行きフランス郵船の瀟洒な真っ白な船体に強い印象をうけ、水夫に即座に応答する浅野君のフランス語に圧倒され、秋から日仏学院の生徒と成った。昭

## 昭和三二年

和二九年三月に Remarques sur l'emploi du pluriel en français を提出して文学修士号をうけ、同時に卒業した久保庭敬之助、原田芳郎の両君と後藤、佐藤両先生にささやかな食事を東京機械会館二階で差し上げた。フランス大使館文化部でアルバイトをしながら日仏学院でジャンムージャン、メクレアン、ジャン・ルキエ、ソーヴール・カンドウ神父、本野などの諸先生の授業を受けていたが秋に佐藤朔先生から電話で無給だが文学部副手にならないかと声がかかり、午前中はフランス大使館、午後は三田という生活が始まった。就職前に西脇順三郎先生の家庭訪問があった。三〇年六月東京日仏学院フランス文明コースの卒業免状を受けた。

佐藤朔先生の留学を羽田に送りに行った晩に急性盲腸炎となり両親も弟妹も前年からパリで暮らしていて独り住まいであったため昔の女中『お千代さん』が掃除に来るまで動けず救急車で古川橋病院に運ばれ日曜日で院長自身の執刀で手術を受け一命を取り留めた。退院後夏の暑気は辛かろうと母の妹、山田康子叔母が箱根の別邸に招んでくれ、叔父山田弘からパリ時代の横部先生の話を聞いたり、叔父の娘、富士子、叔父の妹の娘橋本文子と連弾をしたり、箱根の名所を歩き回ったりした。一〇月にフランス政府招請給費留学生として日本郵船の貨客船『会津丸』で神戸からフランスに向かった。神戸まで伯母清水貞子が娘絢子と同道してくれた。『会津丸』の寄港地は香港、基隆、ペナン、アーデン、アレクサンドリア、ジェノワ、マルセイユで、四四日掛かった。キールンでは数日碇泊したのでバスを利用して台北までいくことが出来た。香港、台湾で華字新聞をかってスエズ情勢を窺ったが幸いにも通過出来た。会津丸はスエズを通過した最後の日本船でこの一週間後、スエズ事変がはじまった。パリに到着してしばらくするとハンガリー動

## 昭和三二年

乱があり三日後にはハンガリーの学生が多くパリ大学都市の各館に受け入れられた。

一〇月、一年間の試行錯誤ののちジャン・ブーティエール先生のロマンス語の四講義をうけ『アンドレ・ジードの文体研究』の筈が中世フランス語、中世プロヴァンス語の勉強に変わってしまった。レオン・ワグネル先生の助手をしていたクロード・レニエ氏からエコール・プラティック・デ・オート・ゼチュードのフェリクス・ルコワ先生の中世仏語セミナーを勧められ出席してみたが写本が全く読めず退散、ブーティエール先生のパレオグラフィの時間に出席したのが機縁であった。文通の末橋本文子と婚約することとなり岳父となる橋本文夫氏が原子力発電所視察のグループで来仏、モリエール街のオテル・モリエールに泊まられ、一行の通訳としてシノンの原子力発電所を見学したりする。

昭和三三年四月に来仏された新村猛名古屋大学教授をルコワ先生のゼミナールに誘い、また井上二葉さん中島美鶴さん新村先生とロワイヨールモンの音楽会にいたり、加藤恕彦、マーガレット・キングと毎週土曜合奏したりした。

## 昭和三五年

四月女子美術大学図案科を卒業した橋本文子がフランスに来てパリ八区アンジュウ通りのYWCA寮に入ってアール・デコラティブ三年級の聴講生となった。七月五日に聖オーギュスタン教会で結婚式を挙げロワールに向かい、ポアティエの中世研究所の夏期講座に参加した。この間フランス政府留学生として来仏した従姉妹山田富士子もポワティエに合流して、ボルドウ、ルールド、リモージュなどを三人で歩きパリに戻り、ヴェルサイユ街一八一番地の一階右側のアパートにすむ。秋には井筒先生夫妻を迎えたり、加藤恕彦君の要請で吉田雅夫氏とランパル氏を夕食に招んだりもした。

## 昭和三十六年

四月帰国途上北欧三国を白領コンゴからイギリスに避難していた妹伸子も連れて旅行中パリから父秀治が重体でパリにはこばれたと連絡あり、急遽文子はパリに向かったが、結局コペンハーゲン空港で合流し共に帰国。霞友会館にとまり帰国の翌日から授業を担当、この時の二年のクラスに後に同僚となる鷺見洋一君、立仙順郎君がいた。麻布の家に両親も戻って来て、長男寛道も生まれ、叔母山田康子所有の新宿区大曲の江戸川アパート42号に引っ越し一七年間住む。この間、新村先生、三宅徳嘉先生、河村正夫氏、神沢栄三氏などと月例の読書会を作り中世フランス語の最古の文献を次々と読む。この会は江戸川アパート五階の書齋、新村先生の青山のアパート、青山会館、国際文化会館など転々としたが『蕃微物語』を一〇年掛かって読み、解散するのが惜しいと今日までメンバーは入れ代わっているが続いている。

## 昭和四四年

渡辺一夫先生から橋本一明氏が急逝したので代わりにパリ東洋語学校の日本語教師に行かないかと電話があり学園紛争中であったが、急遽パリに向かう。ポワティエの中世研究夏季講座にまず行き到着した晩、テレビでアポロ一一号の月面着陸を見た。秋から二年間日本語講師を勤め、ルコワ先生のゼミナールに列席し、日本館に滞在中の福本直之、原野昇、鈴木覚などの諸氏と中世フランス語の読書会を作った。

## 昭和四六年

帰国とともに文学部教授となり慶応義塾通信教育、国際センターなどの仕事にも携わるようになる。この年の春からスキーを始め東京スポーツマン・クラブの会員となる。川村博通先生と熊の湯で一緒に滑ったのが川先のスキー最後の年となる。毎年クラブのスキーに参加、大熊勝郎先生の班に入る機会を得て先生没後も同じグループの交遊を楽しむ。

## 昭和五四年

一月弥永昌吉先生より亡くなった小林正氏の後任として財団法人日仏会館の常務理事を委嘱され今日に至

る。この年六月から一年間日本フランス語フランス文学会幹事長を勤める。

## 昭和五九年

一二月父・秀治八三歳で卒。

## 昭和六〇年

三月フランス政府からレジオン・ドヌール勲章（シユヴァリエ）を貰う。一〇月からフランスのエセック校の客員教授となることになったので四月から半年留学制度を適用して貰い、一年間フランスで過ごす。夏休みにディジョンに語学研修に来ていた次男淳道に会いに行く。淳道はパリで祖母の友人イヴォンヌ・ラティル夫人、ブノワ氏、たまたま滞仏中だった新村先生に会うことが出来たが、ブノワ氏は翌年、新村先生は平成四年に亡くなられた。

## 平成二年

一月還暦を迎える年なので記念にスキーマの検定をうけ二級合格証を丸沼高原で貰う。主任検定員は貝谷浩平氏。還暦祝いなどされては敵わないので文学部美学科三年から最終学年になる予定の娘、まどか連れでフランス旅行に出る。丁度コレージュ・ド・フランスで日本学の講演がありフランク氏、エスマン夫人、オリガス氏などと再会、デュボワ医博の車でリル市にいきロニーと福澤諭吉についてスライドを映して講演、ブリュセルの和風とも中国風ともつかぬ五重の塔を見学し、パリに戻り元エセック校長グザルデル氏の依頼でマルセイユの国際ビジネス学校で遣欧使節のフランス体験についてスライドを映して講演。まどかはリュザルシュのエスマン家に泊めてもらいシャンティの厩を見たりしマルセイユには同行せず、パリ滞在中の十時巖周教授父娘やフレエ嬢などとパリ見物をした。

## 平成三年

四月より京都の国際日本文化研究センター共同研究員となり河合隼雄班で昔話の共同研究に参加。

## 平成四年

一〇月東西説話交流の研究などについて慶応義塾賞を授与される。パリのエライユ夫人から高等実習学院



## 平成五年

の客員教授を一年勤めないかと来信あり、八九歳で研究を続けておられる恩師ルコワ先生に又お目に掛かれる夢が現実化したことに感激、本学年一杯で選択定年を取ってフランスに行くことにして履歴と業績表を送る。

一月七日、牧野信也君からの電話で井筒先生が倒れられた連絡あり、湘南鎌倉病院に駆けつけたが霊安室で御遺体と対面することとなった。一〇月に図書館で著作の小展示をしたカタログをお送りし一二月一七日付けのお便りを頂いたばかりであった。

一月一〇日エライユ夫人から電話で一〇月から高等実習学院（第四部）での任命が最終決定したと連絡があった。

三月慶応義塾を選択定年で退職。

## 著作一覽

### 一 著書

『仏作文の考え方』（第一部、松原秀治、第二部松原秀一執筆）第三書房 一七九頁 昭和四二年刊（一九六七）

（一九八四年一三版）

『ことばの背景、単語から見たフランス文化史』白水社 二二八頁 昭和四九年九月刊

『中世の説話―東と西の出会い』東京書籍 二九〇頁 昭和五四年九月刊

『危ない話、続言葉の背景』白水社 二二〇頁 昭和五四年九月刊

『西洋の落語―ファブリオーの世界』東京書籍 二七〇頁 昭和六三年一〇月刊

『異教としてのキリスト教』平凡社 二四七頁 平成二年一月刊

『中世ヨーロッパの説話』（中西進解説）中公文庫 三四〇頁 平成四年三月刊

### 二 翻訳

ピエール・グリマル『ラテン文学史』（藤井昇氏と共訳）クセジュ文庫 白水社 昭和四一年一二月刊

マリ・ド・フランス『ランヴァル』（グロリア『世界の文学・中世文学』所載、解説 厨川文夫）昭和五四年

ゴシニ・ユデルゾ『アステリックスの冒険①』（監修渡辺一夫、新倉俊一・西本晃二と共訳）双葉社五六頁 昭

和四九年二月刊

ゴシニ・ユデルゾ『アステリックスの冒険②黄金の鎌』（監修渡辺一夫、新倉俊一・西本晃二と共訳）双葉社五六頁 昭和四九年三月刊

ゴシニ・ユデルゾ『アステリックスの冒険③アステリックスとゴート族』（監修渡辺一夫、新倉俊一・西本晃二と共訳）双葉社五六頁 昭和四九年四月刊

モリス『ラッキイ・ルーク①判事ロイ・ピーン』（監修渡辺一夫、新倉俊一・西本晃二と共訳）双葉社五六頁 昭和四九年二月刊

モリス『ラッキイ・ルーク②大陸横断鉄道』（監修渡辺一夫、新倉俊一・西本晃二と共訳）双葉社五六頁 昭和四九年二月刊

モリス『ラッキイ・ルーク③駅馬車』（監修渡辺一夫、新倉俊一・西本晃二と共訳）双葉社五六頁 昭和四九年二月刊

アーバン・ホームズ『フランス語の歴史』大修館書店 一九八頁 昭和四九年十一月刊

井筒敏彦『実存の現代的危機と東洋哲学』（『地球社会への展望』所載）日本生産性本部 昭和五五年刊

フェリクス・ルコワ『マグニファイカート物語を巡って―説話の東西交流』（『文学』二月号）岩波書店 昭和五八年

シュザンヌ・エスマン『十九世紀中葉の和書コレクション、ロニ文庫』（福澤諭吉年鑑15）所載） 昭和六三年

### 三 外国語論文

- “A propos du *Dit de l'Unicorne, pègrination d'un avadana*” (*Etudes de langue et littérature françaises*, No. 22) 1973.
- “Un conte japonais parallèle au *Lai de l'oiselet*” (*Jean Mirrahi Memorial volume, Studies in Medieval Literature*) South Carolina, U. S. A., 1977.
- “Chinese and Japanese version of GAZA” (*Studies on the seven sages of Rome and Other Essays in Medieval literature, dedicated to the Memory of Jean Mirrahi*) Honolulu, Hawaii, 1978.
- “Une version japonaise de GAZA” (*Mélanges de langue et littérature françaises du Moyen Age offerts à Pierre Jonin*) C. U. E. R. M. A., Marseille 1979.
- “Le Motif de la Canne qui murmure” (*Geibun Kenkyū*) 『語文世紀』 No. 44, 1982.
- “Léon de Rosny et Fukuzawa Yukichi” *L'Ethnographie* Tome LXXXVI, 2 pp.109~127, Paris, 1990.
- “The Migration of a Buddhist Theme”, *Literary Studies East and West*, College of Languages, Linguistics and Literature, University of Hawaii at Manoa and East-West Center, 1991.

### 四 主な邦語論文

『アンデル・シードに於ける-mentで終わる副詞』(『フランス語研究』一二号) 昭和三二年

- 『仏語学資料としての古写本』（『フランス語研究』二八号） 昭和三七年
- 『小鳥の歌』について』（『西脇順三郎先生記念論文集』） 昭和三八年
- 『フランス中世文学の写本と校訂法』（『芸文研究』一六号） 昭和三八年
- 『中世仏文学の恋愛観と女性像』（『芸文研究』一九号） 昭和四〇年
- 『聖アレクシウスの妻』（『佐藤朔教授記念論文集』） 昭和四二年
- 『On le suppose à Paris』（『フランス語学研究』第一号） 昭和四三年
- 『フランス語の辞書の比較』（『図書館雑誌』六三卷八号） 昭和四四年
- 『フランスの大学制度—研究者の養成』（『大学基準協会会報』一八号） 昭和四五年
- 『一角獣の西漸と東還』（『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第四号） 昭和四七年
- 『コペルニクスの転回—生誕五百年』（『学燈』七〇卷一一号） 昭和四八年
- 『古仏語作品「小鳥の歌」の写本系統』（『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第六号） 昭和四九年
- 『フランス東洋学とレオン・ド・ロニ、—福沢諭吉との関連において』（『福沢手帳』二二号） 昭和四九年
- 『奉教人の死の源流』（『月刊百科』一四四号） 昭和四九年
- 『ユダの系譜』（『月刊百科』一四七号） 昭和四九年
- 『イエスの肖像』（『月刊百科』一五〇号） 昭和五〇年
- 『古典はなぜ読まれないか』（『三色旗』） 昭和五〇年
- 『フランスと福沢諭吉』（『福沢手帳』五号） 昭和五〇年

- 『聖ヘレナと十字架』（『月刊百科』一五八号） 昭和五〇年
- 佐藤輝夫『ローランの歌と平家物語』書評『比較文学年誌』一一号 昭和五〇年三月
- 『ランブシニトス王の宝』（『慶応義塾言語文化研究所紀要』第七号） 昭和五〇年
- 『東方の苦行僧と聖者伝』（『月刊百科』一六八号） 昭和五一年
- 『西洋人名の背景』（『月刊百科』一七〇号） 昭和五一年
- 『小鳥の歌』の話、東西説話交流の一面（『比較思想研究』四号） 昭和五三年
- 『聖バルラームと聖ジョザファ伝研究序説』（『慶応義塾言語文化研究所紀要』第一〇号） 昭和五三年
- 『現代フランス類語辞典』書評、『週間読書人』 昭和五三年九月二一日号
- 『図書館での出会い』（『回想の厨川文夫』） 昭和五四年一月
- 『中世の闇と光りを通して』『中央評論』三二号 昭和五四年
- 『フランス語の成立』『基礎ふらんす語』一二号 昭和五四年三月
- 『福沢諭吉とヨーロッパ旅行』（『福沢手帳』二二号） 昭和五四年
- 『日仏学術シンポジウム』（『学燈』七六（二一月号）） 昭和五四年二一月
- 連載『続ことばの背景』四六〜八一（スキー、つな、おそろいの話、もうける話、ほめられてけなされている話、恥ずかしい話、五番目の話、汗をかく話、梨の話、小さな話、にわたりの話、大きさの話、聖マルタンの話、聖ドニの話、バプテスマの聖ヨハネの話、三人の聖マリアの話、聖シルの話、聖ヒエロニムスの話、一万一千人の殉教童貞女の話、聖バルブの話、聖マウルスの話、聖母マリアお浄めの祝日の話、聖トマス・アキ

- ナスの話、聖デイマスの話、聖ヨセフの話、パドヴァの聖アントニウス、聖マルガリータの話、聖バルトロメウスの話、聖ラファエルの話、聖ニアームスの話、聖アンドレアスの話、東方の三賢王の話、聖ユリアーヌスの話、聖者伝の話） 白水社『ふらんす』 昭和五年二月～昭和五八年三月
- 『The Size』（語法覚書『英語青年』一二五卷一二号） 研究社 昭和五五年四月号
- 『新聞に見る諷刺の伝統』（『泉』二七号） 昭和五五年
- 『一冊の本』（『本』第五卷第三号、通巻四四号、講談社） 昭和五五年三月
- 『図解辞典』（『言語』九卷五号 大修館書店） 昭和五五年五月
- 『歩を休めて眺める時』（[KULIC] 一三三号） 慶応義塾大学研究教育情報センター 昭和五五年
- 『文学語とレトリック』（フランス文学講座第六卷 『批評』 大修館） 昭和五五年
- 『伝説の巨大な全貌』（書評）『図書新聞』二五一、昭和五六年四月二五日
- 『文化の伝播、説話交流の条件』（『21世紀フォーラム』八号） 昭和五六年
- 『ロランの歌』（『婦人画報』ヨーロッパ古代の神々と英雄・三） 昭和五六年
- 連載『新住まい読本』一～一五（『読売新聞』夕刊） 昭和五六年六月
- 『鳥と民話的想像力』（[IS] 一三卷） 昭和五六年
- 『うどの大木——名著の翻訳をめぐって』（『東京新聞』夕刊九月二二日） 昭和五六年
- 『マルセル・エーメ』（『現代フランス文学作家作品辞典』 講談社学術文庫三九〇 昭和五六年
- 『フランス人の名前』（『言語生活』三六一号） 昭和五七年

- 連載『言葉に魅された人々』（ポール・パリソとガストン・パリソ、フランソワ・レヌワール・エミール・リ  
トレ、アベル・レミュザ、レオン・ド・ロニ、フェルディナン・ブリュノ、アंकテイル・デュペロン、アン  
トワヌ・ガラン）（大修館『言語』に連載八回） 昭和五七年
- 『川先追憶』（『焚火』慶応義塾楽箏クラブ刊） 昭和五七年
- 『タイと日本——タイ語訳「学問のすすめ」をめぐる』、『塾』一一七号） 昭和五八年
- 『野歩き讃』（『楽箏』一六号） 昭和五八年
- 『フランスについての話』（『リーベンニュース』一四号） 昭和五八年
- 『神田讃——神保町の思い出』（『慶応塾生新聞』一五八号） 昭和五八年
- 『野暮のすすめ』（『三田理財クラブ一二五』第五号） 昭和五八年
- 『大学と留学生受入れ』（『大学と学生』二〇八号） 昭和五八年
- 『ポール・アヌイ神父』（『Nouvelles』一七号日仏会館） 昭和五八年
- 『ユダの系譜』（『慶応義塾創立百二十五年記念講演集』所載） 昭和五九年
- 『四句説と肉食の戦い——フランス中世の食物誌』（『飲食史料』五号） 昭和五九年
- 『パリふたたび』（『MUSICA CLUB』vol. 2） 昭和五九年
- 『フランス語から英語へ』（『言語』一三巻七号） 昭和五九年
- 『こどもの読物とテレヴィ』（『無限大』六四号、日本IBM） 昭和五九年
- 『生誕一五〇年記念福沢諭吉展』（『慶応義塾大学報』一五四号） 昭和五九年



- 往復書簡『島々と都会』（岡谷公二と『三色旗』一二月号） 昭和五九年
- 『地人会』と『コマ』（『池田弥三郎 人と学問』 昭和五九年七月
- 『日本語は国際語になれるか』（『学燈』八一（一〇月号）） 昭和五九年
- 『パイヤン惜別』（『流域』一五号） 昭和五九年
- 『忙中の閑』（『三色旗』四四三号） 昭和六〇年二月
- 『福沢の素顔語る英文書簡』（『日本経済新聞』三月一日） 昭和六〇年
- 『レオン・ド・ロニ略伝』（『近代日本研究』第三卷一―五六頁） 昭和六一年
- 『何がフランス語に訳されているか』（『学燈』八三（八月号）） 昭和六一年
- 『福沢諭吉の英語』（『学燈』八四（四月号）） 昭和六二年
- 『ロニイ宛渡欧洋学者書簡』（『福沢諭吉協会年鑑』一三号） 昭和六二年
- 『アンブロワーズ』『聖戦記』写本断片について（『慶応義塾大学日吉紀要』六） 昭和六三年
- 『四年後のヨーロッパ統合と大学』（『三田評論』一一月号） 昭和六三年
- 『ジョゼフ・ペデイエの校訂法再論』（『慶応義塾言語文化研究所紀要』第二一号） 平成元年一月
- 『サン・モール会師ジャン・マビヨン』（『慶応義塾大学日吉紀要』七） 平成元年三月
- 『二本足で立つ学者』（平川祐弘『進歩がまだ希望であった頃』講談社学術文庫解説） 平成二年一月
- 書評『池上俊一…動物裁判、西欧中世・正義のコスモス（講談社現代新書）』『産経新聞』一九九〇年一一月
- 『アサクサンダー大帝の海底旅行』（『芸文研究』第五八号、大学制度百年記念号） 平成二年一一月三〇日（一

九九〇年)

『対馬問題とフランスの新聞』(『福澤手帖』六七 二二一―二六頁) 平成二年一二月

『Cinquième roue du Carosse』(『慶応義塾言語文化研究所紀要』第二二号 平成二年)

『イールのヴィーナスと『教父伝』』(『芸文研究』五九号大濱甫教授退任記念論文集、一―二五頁)

連載『地中海世界の町々』(マルセーユ、ナルボンヌ、ニース、アジャン、オランジュ、エグ・モルト)(白水

社『ふらんす』四月号―十月号) 平成三年

『ヴィアルド夫人のサロン』(『フォーレ手帳』第二号、一七―三〇頁) 日本フォーレ協会刊) 平成三年九

月

『エマニユエル・シヤブリエ』(日仏会館・コンセルヴC 共催プログラム『フランス歌曲の歴史シリーズ』六)

平成三年一二月

『フランス音楽と日仏会館』(同右) 平成三年一二月

『渋沢・クローデル賞の八年』(坂井光夫と共著)(『日仏文化』五五号) 平成四年

『普仏戦争と渡六之介の『巴里籠城日記』』(『芸文研究』第六〇号) 平成四年三月